

小名峠（冬）

野上 淳

の束を脇に抱えて、駆け出した。県道の山側には、道に覆いかぶさるように茂っていた雑木の枝枝は、すっかり裸木となっていた。いつもの様に峠の上り口にある神社の石段を登っていくと、境内の裏から和子ちゃんが顔を出した。

「涉兄ちゃん、皆呼んでくるからそこで待ってて」

と言いながら社殿の裏に消えた。しばらくすると同級生の真弓君や大山君、米本君、青木君と南田君そして美人の吉本さん、今年小三になって本校へ通うことになった和子ちゃんと、いつもの七人の元気な顔が神社の森の奥から這い上がった。涉が立っている足元の石段には、ランドセルが積み重なって今にも滑り落ちそうになっている。

石段を降りて峠道に差し掛かると、誰かが叫んだ。

「おい、雪やで。雪」

とその声にいっせいに空を見上げたが、それらしいものは降っていない。和子ちゃんは、

「なんや、あれは雪ちゃうでえ。芒の綿やんか」

といつも元気である。今年初めて峠を越えた和子ちゃんは、雪の峠道を知らない。そのうち雪が積もれば泣き出すかも知れないのだ。その雪を待っているのは和子ちゃん

涉の心の中には、秋祭りのだんじりの思いが残っていた。生まれて初めてだんじりに乗せてもらったときの昂奮が、体のあちこちに残っている。手を握れば撥の感触が指先に甦ってくる。同時に胸の高鳴りが聞こえて太鼓が響く。この感激は一生忘れることはないだろう。思い出すと全身が震える。こんな時同級生にでも会おうと、自分の心の中を見透かされそうだが、どうすることも出来ない。

今日学校の帰りには、校庭の銀杏やポプラの葉はほとんど散っていた。涉は家に着くと、いつものように新聞

人だけではなかった。実は渉も雪の便りを待っている一人である。小名峠に雪が積もれば新聞を配るのが大変であることは、母から聞いてはいるが雪の峠道は知らない。何日も降り続くことはなく、二日も降れば晴れ間が出て雪は道の曲がり角に残るだけである。根雪になることはなく、カーブの所さえ気をつければ通ることは出来る。だが三日も降れば三十センチになることもあるのだ。和子ちゃんには大変だと思ふ。そんな雪道の怖さも体験できるのだからいいのかもしれない。今月の中ごろには雪の日が何日かあるだろうと母は話していた。

渉は雪の話になると、そわそわしてることがある。誰にも話してないのだが、内田のおばあちゃんと約束したことがあるのだった。おばあちゃんは、

「涉ちゃん、雪の顔を見たらおばあちゃんに教えてな。あんたに渡すもんがあるのや。私一人が楽しみにしていることかも知れんのやけどなあ」

と、いかにも嬉しそうな顔をしていたのを渉は忘れてはいなかった。新聞を配り終えて帰りには内田さんの家に立ち寄っていいこうと思つている。峠の天辺に着いた頃には黒い雪雲が頂上近くまで垂れ下がってきていた。峠の上り口で誰かが叫んでいたのは雪だったのかも知れな

い。渉は峠を下ってゆきながら、友達に持つて帰つてもらう新聞をそろえて三人に渡した。黒い雲の速い流れを見て、南田君がどなる。

「やつぱり雪やがな、走つて帰ろや」

南田君を先頭に同級生のあとに付いて和子ちゃんも走り出した。

渉が最後の一軒を配り終えた頃には、白い物が降り始めた。初雪だった。これからは雪の中の配達も覚悟しなければならぬ。和子ちゃんのことにも気にはなるが、その前に自分のことを考えなければと思う。そんなことを考えながら寺の前の道路に出た。約束を思い出したのだから、遅くなつても、思い切つて内田さんのおばあちゃんを訪ねたのは、四時三十分を回っていた。あたりの家々には明かりがついて、煙突からは白い煙があちこちから上がっている。渉は煙を見ると急に家に帰りたくなる。が、今日は内田さんによつてかえる心算なのだ。約束したときは、雪が降れば必ず家に寄るようにといわれていた。

「内田さん、おばあちゃん、渉です。この前の」と言つてあとの言葉を言いよんでいると、

「涉ちゃんか、今日は遅かつたなあ大丈夫か。待つてた

んや」

と言いながら、上がり框ちに置いてあつた新聞紙に包んだままのものを渉の前において、

「これなあ、私が去年まで履いていたものやけど、あんたの足に合うたら使うてくれるか。女物やから嫌か。ゴム長は男も女も変らへんやろ、開けてみてよかつたら履いて帰つたらええし、嫌やつたら放つて置いたらええのやし、涉ちゃんがきめたらええ」

と言つてくれた。渉の胸がどきどきしてきたのが分かる。一瞬ためらつたが、思い切つて新聞の包みを開いた。そこには紺色の婦人用のゴム長が少し白っぽくなつていたが、そんな古くは感じなかつた。それを見て、渉はとつさに心の中でおばあちゃん有難うと叫んでいた。それは婦人用といつても黒に近い濃紺だつた。渉にはかっこよく見える。

「これ、俺に呉れたらおばあちゃんのが無くなるやんか。雪の日は外にでられへんでえ」

内田さんのおばあちゃんは渉の声には耳を傾ける様子も無く言つた。

「それでもよかつたら貰うて呉れるか。つま先のほうが窮屈で困つていたんや、私は大きめの物を買うたんや」

おばあちゃんの声を聞きながら渉はゴム長の裏を見

た。裏はかなり減つてはいるが、溝ははつきり残つてゐる。雪の上だと少し滑るかも知れないが、そのときは縄を三回ぐらい巻きつけければ滑ることは無いだろう。渉はこのゴム長さえあれば、どんなに雪が降り積もつても何も心配することは無いと思つた。そしてこんなええゴム長は離したくないと思うのだけど、母さんに見せると、「どれ、母さんにはどんなもんかなあ、ちよつと貸して」と言うに決まつてゐる。母が履いてしまつと、

「私にびつたりやなあ。涉どうしよう、脱ぐのがもつたいないぐらいや、このままでええやろ」

と言われそうな気がして、母に見せることさえためらわれた。が、見せないわけにはいかない。母さんも新聞配るんやから貸してやることにすると、渉は一人で決めてニヤニヤしていると、

「涉ちゃんどうしたんや。何かおかしいことあるんか」

と聞かれたがそれには答えず、

「おばあちゃん、おおきに。俺氣にいつてもたんや。ここで履いてもええかなあ」

渉は内田さんの前で履いてみてもらいたいと思つた。

「おお、はよう履いて見せておくれ。涉ちゃん、あんた

がこんなに喜んでくれるとは思って無かったがな。おおきに、おばあちゃんの履き古しの靴を喜んで使って呉れるなんて、ほんまにおおきに。私の孫は大人になってしまったやろ。何もまに合わんや、それを涉ちゃんが貰うて呉れるなんて、嬉しゅうて涙が出るわ」

涉がゴム長を履いたのを見て、おばあちゃんは涙を拭いている。嬉しくて涙が出そうになるのは俺の方やのにと涉は思いながら、ゴム長を新聞紙に包んで脇に抱えた。「おばあちゃんおおきに、返せ言うても返せへんでええええやろなあ」

内田さんは涙の溜まった眼で涉を見て、

「涉ちゃんがおばあちゃんの言うこと聞いてくれて嬉しいのや。返せなんて言うかいな。持って帰るって言うてくれて、ほっとしてるんや。外は暗うなったよって気いつけて帰りや」

「はい、貰うてかえります。おおきにおばあちゃん、さいなら」

涉は、脇に抱えたゴム長のことを思う。あしたの朝はきつと母が履いて、自分の区域の新聞を配るだろう。その姿を思い浮かべると、涉の顔は嬉しさに火照る。秋まで二人の妹が配っていた新聞を母が配るのだ。ゴム長を

履いて配る姿を思い浮かべるだけで楽しくなる。母もきつと出かけるときはゴム長の前に縄を巻きつけて履いてゆくだろう。いろいろ思い浮かべながら、小走りで小名峠の頂上に着いたころには雪はやんでいた。雑木林に覆われて、夏には鬱蒼としていた峠道も秋から冬になると、裸木の林となる。空を見上げると、宵の星が枯れ木の枝の間から三つ四つと見えてくる。白い雲の間を見つめていると、流れる雲に父の顔らしい物が見えて、

「涉、ええもん貰うたなあ、母さんも喜ぶやろ。おばあちゃんからのお礼やがな。これからも手紙書いてやってくれよ。父さんの代わりやからなあ。涉この前は役場で元氣出しすぎたんと違うか。あんまり無理しなや」

父さんの声は強い風に吹かれて消えてしまった。

「父さん、これからも時々出てきていろんなこと教えてな。俺何んにも分からへんや。母さんに聞いても世の中のことは知らん言うし、俺困ることがいっぱいや。今日は父さんのお蔭で、ええゴム長貰うことができたんや。父さんおおきに、走って帰るわ。走るの嫌やねんけど、誰かが後ろから走ってくるように落ち葉が、がさがさ付いてくるんや。俺が家に着くまでみとどけてや」

涉はひとしきり父と話をしたことで、峠道の魔物を遠

ざけることが出来たと思った。それでもしばらくすると、誰かが渉の背中にぴたっとくっついていてる。走っても走っても付いてくるのだ。九十九折れを何度か回ってやっと神社の森の横に出た。駐在所の時計は六時二十分を指していた。背中の汗が冷たい。内田さんの家に長い時間いたことになる。そんなに長居をした心算はなかったのだが、ゴム長に渉の心が釘付けになったのだと思う。ゴム長なんて買ってもらえることはまず無いのだ。それをもたらしたのである。早く母の顔が見たい。母は、どうしてそんなに簡単に貰ってくるのや。畑で筋芋をもらうのところがうんや。お金の掛かっているものは考えてからにしてやと、小言を言われるだろうか。これは母がいつも言っていることである。渉はそのことをすっかり忘れてしまっていた。このゴム長を見て、いつもの母だったら返してこいとは言わないだろうと思うが、虫の居所が悪いときは何を言い出すか分からない母である。

家の近くの県道のカーブを回ると、目の前に提灯の灯が見えた。渉を迎えに来たおぼんの提灯だと思った。暗くなると危ないから表にはでるな、と母からきつく言われているのだが、渉のことが心配だと遅くなると迎えに来てくれる。

「おぼん、寒いのに何でくるんや。こけたらどうする心算や、俺はうれしいけど」

と言うとおぼんはいつものように、兄の戻ってくんのが遅いと心配で、迎いにくんのや堪忍したってや。と言いながら先に立って明かりが渉の足を照らすように持ってくる。そんな祖母が渉にはたまらなく嬉しい。母には無いところが祖母のいいところなのかも知れない。

母に内田さんのことを話して、ゴム長を見せると、「渉、よかったなあ。ええお礼貰ろておぼあちゃんの前で履いて見せたか」

とやさしい母だった。そして、

「明日からは雪でも大丈夫やなあ。朝は母さんが履かせてもらうけど、昼からは渉のもんや」

と、母は案外渉の言い分を簡単に聞き入れてくれた。助かったと渉はほっとする。やっぱり母が履く心算らしい。それでもよかった、とゆっくり寝られそうな気がした。

渉は、小名峠を越えて帰る同級生達とは家の下で別れて、わきの細い坂道を駆け上がった。家にはおぼん一人がいた。

「おばん、一杯よそて」

と暗い奥の炊事場にいた祖母に声をかける。祖母は、「兄か。いつも同じもんしかないけど、兄が貰うて来たさつま芋の入った茶粥じゃ、鍋のそこに残つとるで全部食べていってや。食べたらずらんと、日が暮れて来るでえ兄よ」

とおばんは次々と追い回してくる。涉はいらついで、「分かつてるがな。まだ茶碗も持つてないんや。急かさんといてや」

と大声で怒鳴つてしまふ。こんなときおばんはいつも決まったことを言う。

「そうか、兄やおばんが悪かった。堪忍したつてや、年寄りはいらんことばっかり言うてしまふんや、ほな氣い付けて行けよ」

と表に出て行つてしまふのである。涉はおばんの氣持ちはよく分かるのだが、いつものことなのでいらいらする。涉も日の暮れが早くなつた分急がなくてはと思うのだけど。筋芋の切れ端が底に沈んでいる鍋を傾けて、今日は芋が三切れも残つていた。おばんが涉のために残しておいたのだと思うと、おばんおおききと言う氣持ちになる。芋を食べながら茶粥を喉に流し込む。

同級生たちは夏の間は神社の森の中で一休みしているのだが、日が短くなり峠の木々が暗く迫つてくると、家に路に急ぐことになる。涉の追いつくのを待つていてくれるのだが、雪交じりの風が吹いてくると鬼ごっこをして体を温めるか社務所の前の焚き火に当るしかないのである。涉は新聞の束を脇に抱えて家を飛び出した。走れば五、六分で神社に着く。昨日の雪は県道には無く、近くの山の枯れ木の枝に残つた雪が、花が咲いたように夕日に照らされていた。県道はなだらかな上り坂になって神社の森が見える頃には急に落ち込んでいる。落ち込んだ道を右に曲がれば突き当りが神社である。涉はみんなのまっている神社の石段を登つた。境内の広場の真ん中に大きな穴が掘つてあり、底に落葉を履き集めて一日中火を焚いていた。皆は焚き火の周りに集まっている。裏の森から木の枝を拾つてきて、焚き火に投げ込んでいるのは、同級生の真弓君だった。石段を登りきつた涉を見て、和子ちゃんが手を振る。

「ご免、さあいこか」

と涉が声をかけると、七人の小学生はいっせいに立ち上がつてランドセルを背負つた。石段を駆け下りる。峠に差ししかかつてカーブになると、両側は五センチほどの

雪が残っていた。今年初めて本校に通い始めた和子ちゃん、誰にも負けないはしゃぎっぷりで、トラック道を左に折れて急な細い近道に入っても、道端の雪の中へ足を踏み入れては喜んでいる。時折、道路の上に伸びた雑木の枝に付いた雪が風に吹かれて、みんなの首筋に入るときやあきあ、わいわいとやかましい声が、近道を頂上に向って登っていく。もうひと廻りすれば頂上だと言うところで自転車を押している人に会う。小名地区の南田君や米本君が駆け寄って、荷台の荷物に手をかけて押し上げた。急に軽くなった自転車の人は、

「おおきに、助かるなあ。自転車止めて休もうかと思ったんやけど」

と言いながら、息を弾ませた。頂上に着くと日は高くに見えたが、広場から谷底に見える小名の集落は大きな陰の中にあつた。近道とトラック道との交わった県道に出ると、心まで広々とした思いになった。小名の集落のはじめの家が近づくと、渉はいつものように殿川地区へ帰る大山君と和子ちゃん、北谷地区の吉本さんに持って帰ってもらう新聞を書こうとしていると、

「渉君、俺の持って帰る分は判ってるから、何も書かんでもええでえ」

と声をかけてくれた。それを聞いていた吉本さんも、「私たちも覚えてしもたからそのままええよ。なあ和子ちゃん」

と言つて和子ちゃんを振り返る。和子ちゃんも、うんええよと返事しながら渉の前に手を出す。

「おおきに。雪のあとやから気をつけてや」

と言いながら渉は三人に配ってもらう新聞を預けた。

そのあと渉は黒い雲の広がり始めた小名の集落を配り終えた頃は、残っている雪の明かりはあつた。が、家々では夕餉の準備に忙しいのだから煙突からは白い煙が上がつっていた、寺の前を右に折れた。内田のおばあちゃんに昨日のお礼を言うつもりで急いでいると、あたりが薄暗くなった畑の中から、

「涉ちゃん。昨日はおおきに、あんな物持って帰つてお母さんに怒られへんかったか。どうや長い道でも履けそうか。涉ちゃんが嫌やつたら、畑仕事にでも使つてもろてや」

渉が声をかける前に、大根を引いていたおばあちゃんから声が掛かった。

「おばあちゃん昨日は有難う。母さんも喜んでくれたんや。俺と仲間履かせてもらおうと言つてました」

「そうか、それはよかった。今日なあ創から手紙がきたんや。今度の土曜日に読んでくれるか、頼むわなあ」

と創さんから便りがあったことを知らされる。渉も気になっていたのでたちよってみたのである。

「土曜日にゆつくり読ましてもらいます。俺も手紙のことが気がかりやっただんです。今月中に正月のことをはっきりさせとかなあかんしなあ、おばあちゃん」

創さんが結婚したい相手を連れて帰りたいと言っているのだ。おばあちゃんは、正月に二人で来ることを楽しみにしている。渉は他人事であっても、何とかおばあちゃんを喜ばせてやりたい。嬉しそうな顔を見たかった。夏ごろからずっと待っているのだ。年末から正月の休みを利用して帰る心算らしい。

「おばあちゃん、どんなこと書いてあるんやろなあ。わくわくするなあ」

「渉ちゃんもそうか。一緒やなあ。おばあちゃんもどきどきしてるんや。夕べは手紙抱えて寝てしもたがな。あと二日待つからな、読んで聞かせて」

一日でもはよう手紙の内容を知りたいのだからうけれど眼が悪いために、渉の時間の都合の付く土曜か日曜まで待っている。待ってもらっている間の時間がなかなか進

まないの、渉はやきもきするのだがどうすることも出来ない。これから読む手紙の中には、創さんの帰ってくるバスの時間や帰ってからの予定が書いてあるはずなのだ。創さんのお嫁さんになる人の顔を一日でも早く見たいのはおばあちゃんだけではない。渉も同じであった。渉は創さんにもまだ一度も会っていないのである。手紙の上ではお兄ちゃんと弟と言った感じなのだが・・・今年度の土曜日はいろんな意味で待ち遠しいのである。

今年雪が積もっても、平気だ。昨日内田のおばあちゃんに、手紙を書いたり読んだりしているお礼だと言って、婦人物ではあるが、紺色のゴム長をもらった。けさは母が早速履いて新聞配達をしたと思う。

「おばあちゃん、冬休みに入ったら筆筒なんか置き換えをする日も決めてや。俺一人では無理やろ。友達の南田君や米本君に来てもらおうか、何人ぐらい来たらええの」

と渉は創さんが帰るまでに、家の中を整理したいと言っているおばあちゃんをせかせかせるつもりで言った。

「ああ、そうやなあ渉ちゃん一人では無理やし、あと二人はほしいなあ。すっかり忘れてたがな、米本君と南田君か。おばあちゃん知ってる子かも知れんなあ」

内田さんは年末を気にしているようだが、何から手を付けていいのか分からないらしい。そわそわしていて、いつもと違うおばあちゃんが見えてきた。土曜日に手紙を読むのだけれど、渉は手紙の内容が気になる。おばあちゃんを喜ばせることばかりならいいが、女の人が、どうしても田舎へは行きたくないと言えどどうなるのだろう。渉は、おばあちゃんの困るようなことばかりを思い浮かべるのである。だが、考えすぎだとも思えないのだ。渉には、創さんが、おばあちゃんを喜ばせてやりたいと思う気持ちが強くなって、無理をしても連れて帰る心算なのかも知れない。女の人はいいとしても、両親にはこの話は届いてないことも考えられる。もしかえてこられないとなれば、おばあちゃんをどう慰めていいか、渉にはさっぱり分からなかった。あさってまでの二日間はいいとしても手紙の内容によつては、母さんの知恵を借りなくてはならないだろう。いい方向に進んでくれればいいのだけれど、渉は考えをめぐらせる。どこと無く落ち着きの無いおばあちゃんを見ていると、かわいそうに思えてくる。渉は、

「おばあちゃん、今日は帰ります。土曜日はゆっくり出来ますので待っててね」

と言いつつ、内田さんを後にした。

約束の土曜日は午後から雪になるかも知れないから、遠い家の子は早く帰るようにと、受け持ちの先生が告げた。渉は掃除が終ると、小名地区や殿川地区へ帰る同級生と共に校門を出た。家の下まで一緒に帰ってきた人たち、

「今日は昼飯食べてから新聞配るんで、大山君吉村さん、和子ちゃんいつも有難う。俺一人で配れるから気いつけて帰ってな」

といつも近所の新聞を持って帰ってもらう人達と別れて、県道より高い所の家までの細い坂道を駆け上がった。渉は家に着くと先ず地方紙のタイムスや日日新聞と全国紙の四十部ほどを折りたたんで配る順に組んでから、芋粥を啜る。東ねた新聞を脇に抱えると、渉は家を飛び出した。その頃から黒い雪雲が、近くの山に掛かるように垂れさがっていた。

渉は内田のおばあちゃんに貰った紺のゴム長を履いて行く事にした。少し照れくさい気持ちはあったが、嬉しさのほうが強かった。雪は降っていないが、今日は内田さんに寄って、創さんからの手紙を読むことになっ

ているので遅くなるだろうとゴム長にした。

八十歳近いおばあちゃんは眼が悪く字が読めないのである。渉が読むまでは郵便配達をしていた父が読んでいたのだった。が、父が戦争に取られたあとしばらくたって、渉が新聞配達をするようになった四月から、おばあちゃんに頼まれて、手紙を読むようになったのである。今日は創さんからの五通目の便りを読むことになっている。おばあちゃんにすれば、今度の手紙はいつもの便りとはまた違った意味で待ち遠しいのだろう。たった一人の孫が久しぶりに帰ってくる。それも女の友達を連れてである。その日と時間と女の人が来るのかどうかとも、今日の手紙に書いてあると渉は思っているのだ。渉がどきどきするぐらいだから、おばあちゃんはたまらないだろう。渉の姿を見たさに吹き曝しの畑に出て大根を引いたり、白菜に新聞を巻いたりしている。寺の裏の道を回って渉が顔を出すまで、渉ちゃん遅いなあと二人ごちたり、腰を伸ばしたりしながら待っている。

渉が配達を終えて内田さんの待つ畑まで来ると、「涉ちゃん待ちかねたがな。なんや、雪が降る言うのに汗かいてるんかいな。熱いお茶にしようと思おてたんやけど、冷たいほうがええか」

と言いながら畑の中を歩いて庭先に出てきた。

「はようおいで、待ち疲れたがな」

と言って先に立って家の中へ入っていった。二つ折れになって歩いていく、おばあちゃんの後ろについて一歩家に入ったが、暗くて何も分らない。土間に立っていると電気がついた。内田さんの家は藁葺きの家で、明り取りは高い所に一箇所あるだけで昼でも電気を付けないと見えにくいのである。先に入ったおばあちゃんは明かりをつけて、

「涉ちゃん、今日はちよつとぐらいゆつくりでけるやろ。あんたが来てくれるのをどれだけ待ったか知れんぞえ」

と言いながら、折られたみのテーブルを出して、その前に渉を座らせると、

「かき餅焼いてあるんや。お茶飲んで、ほつほつ読んでくれるか。その前にちよつと待ってや。ええことばつかり書いてあるとは限らへんなあ。覚悟して聞かんとあとが怖いなあタオル持つてくるわなあ」

おばあちゃんも怖いらしい。渉に早く読ませたいんだけど、やつぱり怖い。そうだろうと渉は思う。今のおばあちゃんの胸の中はどんなだろうと思うと、読むのを止めようかと考えてしまう。ここで止めて帰ってしまうこ

とは出来ない。内田さんを悲しませるようなことが手紙にあった場合のことは、母に聞いておくべきだったと後悔する。タオルを持つてくるまでの間、渉はいろいろ考えたが何も浮かばなかった。おばあちゃんが座ればもう読むしかない。奥から出てきたおばあちゃんは、

「渉ちゃん、お待ちとうさん。用意ができたし、読んでくれるか。もう心配要らんでえ、仏さんに頼んできたからなあ」

そう言つて卓袱台の前で、両手にタオルを握り締めていた。それを見て渉はおかしかったが笑うことも出来ない。

「おばあちゃん、そんなに考え込まんでもええのと違う。創兄ちゃんも考えて困らすことは書いてこんと思うけどなあ。まあ読んで見るわなあ」

渉は手紙を取り出すと、いつもよりも声を落として読み始めた。

「お元氣ですか。もう雪は降りましたか。おばあちゃん、風邪を引いてませんか。僕は毎日元氣で会社に行つています。正月に二人で帰る心算だったのですが」

とここまで読み進めていくとおばあちゃんは、

「渉ちゃん、ちよつと待つて、帰る心算だったのが、ど

うなつたんやて。ほんまにもう嫌やなあ、読んでもらうのやめよか」

と手紙の先を聞かされるのが怖いようだった。渉は、「おばあちゃん、読んでみんことには何があつたんか解らんやろ。もうちよつと読んでみるわ」

と渉はあとの手紙を読み出した。それには、
あちらのお父さんが、急に腹が痛いと言ひ出して病院で診てもらつたところ、盲腸炎が見つかつたと書いてある。そこまで読むと、

「えらいこつちやなあ、盲腸炎つてどんな病氣や。渉ちゃん知つてるか、そういえばこの村の人もそんな病氣になつたと聞いたことがあるわ」

とおばあちゃんは渉の読み進めるのを時々止める。

「大丈夫やと思うわ、読むよ。ええなあ黙つて聞いてや。手術したら治るんやろ」

読み進めると、癒着してなければ一週間ほどで退院できるらしいと書いてあつた。黙つて聞いていたおばあちゃんは、

「大事おほごとにならんたらそれでええ。なあ渉ちゃん、ほつとしたなあ。そやけど癒着つてなんや知らんけど、もしそれやつたら何時になるんやろなあ。まあ、創たちに何も

無かったことはええこっちゃ。なあ涉ちゃん、ほっとしたなあ」

と同じことを繰り返して、おばあちゃんは胸を撫で下ろした。

「涉ちゃん、一息つかか。おばあちゃん疲れてしもた。かき餅食べてゆつくりしてから、続きを読んでなあ」

おばあちゃんは本当に疲れた様子で、べつたりとおばん座りをした。その背中には、土間で焚いている大きな薪ストーブの暖かい空気が豊を伝って這い上がっていた。天井の無い藁葺きの家は、火鉢ぐらいでは部屋は温まらない。涉の家はトタン屋根なので、箱火鉢でも寒さを凌ぐことは出来た。薪ストーブを焚く家では、夏から雪の降るまでに近くの山に出かけて枯れた枝を拾い集めるのだ。内田さんの家でも庇に届くぐらいに積み上げている。丸太を割った薪は近所の人に頼んで買っているようだった。それも家のぐるりに積み上げられていた。茶を飲んでほぼりほぼりとかき餅を口に入れていたおばあちゃんは、

「涉ちゃん、すまんがストーブに柴をくべてきてくれるか。入るだけ詰め込んでおいてや」

と背中がなかなか温まらないのか、ストーブの火が気

になるらしい。涉が席に戻るのを見て涉を急かせるように、

「ほつぽつ読んでくれるか。もうびつくりすることもかいてないやろ、はよう入院したら退院も早いわなあ」

と涉を見る。

「ほんなら、読むよ。おばあちゃん入院するのは十二月に入ってからになるらしいなあ、手術のあとは経過を見るために一週間ほどの入院が必要と言われた。そのために帰ることが出来なくなりました。おばあちゃんと三人で、田舎で正月を迎えるのだと張り切っていたので残念がっています。退院されれば必ず帰りますので楽しみに待っていてください。一月中にはおばあちゃんに会えると、顔をほころばせています」

おばあちゃんの顔は急に楽しそうに一回り大きく見えた。一時はどうなるかと思っていた涉だったが、やれやれと胸を撫で下ろす。ところが、次の行へ眼をやると、「あと一ヶ月あるかと思っていたので、彼女は父母に田舎へ行くことを話してないのです。話さえすれば解って貰えるものと思っているので、大丈夫だと思えます。こんなことを書くとおばあちゃんは心配するかも思ったのですが、病気も驚くほどのことではないとの医者言葉

です」……ここまで読み進めてきて、おばあちゃんに眼を移すと内田さんも渉を見ていた。

「涉ちゃんちよつと待つて、気になること書いてあったなあ。田舎へ来ることに親に話してないんやて、どう言うこつちや。これやったら、病気が治つても両親があかん言うたら二人で帰つてこられんつてことやろ。こんなに押し迫つてきてもまだ話もしてないんやて。これはあかんでえ。創一人の考えだけではなんにもならん。おばあちゃんの言うてること間違うとるか、涉ちゃんどう思う」とおばあちゃんに次次喋られると、渉の頭の中は混乱してしまふ。内田さんの言うことも分かるのだけど、返答のしようがない。渉は、

「おばあちゃん、今はあちらのお父さんの病気を治すことが一番やろ。俺なあ、手紙読んでいて思たんやけど、これでよかつた思うねん。創兄ちゃんがあちらの親の面倒を見てやつたら、女の人も喜ぶやろ。そしたら、今度はおばあちゃんが少しぐらい無理を言うても聞いてくれて当たり前やと俺は思うけどなあ」

と言うておばあちゃんの言葉を待った。しばらく考えられているようだったが、

「涉ちゃん、あんたの言うことも考えられるなあ。そうや、

あちらさんに貸しを作ったことになるのや。そう思うたらええのや。おばあちゃんの気持ちも軽うなったようやわ。涉ちゃんええ事言うなあ。おおきに」

おばあちゃんは、貸しが出来たと言うことで心の中の整理が出来たようだった。

「涉ちゃん、あちらのお父さんは頑固もんと違うかなあ。もしそうやったら、自分の世話になったことを棚にあげて、俺の病気とお前の結婚は別の問題や言うて、田舎へなんか行くなと言うのんと違うかなあ。どうもそんな気がしてきたわ」

とおばあちゃんは、次第に自分を苦しめていくように話を待つていつている。渉にはそう思えた。

「おばあちゃんは自分を苦しめているように俺には見えるんや。あんまり考えすぎと違うの。おばあちゃんが言うように貸しを作ったんやから、あんまりな事は言うてけえへんのと違うか。苛々せんと、次の手紙を待とうや」

渉はおばあちゃんの気持ちをやわらげようといろいろ考えるが、いいことは浮かんでこない。だけとおばあちゃんの言うように貸しを作ったと思うことで、創さんも肩の荷が降りた思いだろう。これで自信も付くだろう。渉はなぜかほつとした。これで両親を説得させることは、

案外スムーズに行くだろうと思っっているに違いない。このことがあったお陰で全て上手くいくと、渉は思った。「おばあちゃんよかつたなあ。おばあちゃんの思い通りになるようなあ。ちよつと遅うなるようなけれど、ええ返事もらえるんならそのほうがええよなあ」

渉は、元氣を取り戻したおばあちゃんを見てほつとす。手紙の最後には両親の説得は娘からの方がいいと思うので、任せていると書いてあった。手術の結果は手紙でお知らせします。おばあちゃん少し遅くなっただけで、正月過ぎになります。おばあちゃん少し遅くなっただけで、待っていてください。今日はお知らせまで・・創」と書いてあった。おばあちゃんは、

「涉ちゃん、おおきに。親が病氣なら仕方ないわなあ。あの娘も親に話しにくいのやろ、判らんでもないねんけど。もう一ヶ月待つことにしよーか。時間はたつぷりでした、家の片付けでもするか。涉ちゃん冬休みに入ったら忙しなるとえ」

と諦めるのも早いおばあちゃんである。渉は、「家の片付けをする時間がでけたんや。俺等も休みになつたら何日でも手伝うし、おばあちゃんよかつたなあ」

渉は内田さんの機嫌がよくなったことが嬉しかった。

外を見ると峠の影がおばあちゃんの家をすつぱりと包み込んでいた。遅くなると家で心配するから帰りますといつて、表に出た。

十二月に入ると、急に雪の降る日が多くなった。毎日のように降るが、道に積もることは無い。粉雪になったり、霰に変わったのだが、直ぐに融けてしまう。山の木の枝や野原が白くなるくらいであるが、底冷えがしてくる。渉は小名や殿川へ帰る友達と小名峠を越えるのだ。峠の手前にある神社の石段を登り、境内の広場の焚き火に当っていくのである。神主さんたちは、子供が帰ってくる頃にあわせて火を焚いて待っていてくれた。子供たちは顔が赤くなるまで火に近づく。中には、汗をかき子もいた。ひとしきりわいわい騒いで帰っていくのである。渉が石段を駆け上がっていくといつも和子ちゃんが、渉が来たことを上級生に告げると、いつせいにランドセルを肩にかけて階段を走り降りるのだった。神社の人たちはそれを見て声をかけてくれる。子供たちは走りながら、「おっちゃん、おおきにありがとう」

と思ひ思ひのことを言つて、神社を跡にするのである。トラク道から近道の急な坂に入ると皆の足は遅くなる。雪の残っているところまで来ると、わざと足を滑ら

せて転んでみせる真弓君。そのあとに続こうとする和子ちゃん。和子ちゃんは、初めて峠を越えて冬を迎えるので何を見ても珍しいらしく、誰かが始めると真似をするのだ。危ないからと注意するといひ返事が返ってくるのだが、止めようとはしないのである。一人きやつきやつと騒ぎながら、細い峠道を登っていく。本当に滑ることもあつて、穴ぼこに足を取られてべそをかくこともある。頂上近くになると小杉林の中の道は雪明りだけで、辺りは薄暗くなっている。大山君は、ランドセルの横にぶら下げている角ばった形の電池を手持って、先頭を歩くのだ。これでやつと明るい道になる。曲がり角には外灯がついているが、遠くには届かない。これは大山君の宝物である。親に無理を言つて買つてもらつたのだ。六人の小学生たちは、大山君の後について先になつたり、前に出て電池の届く範囲はどのくらいなんだとかやかましい。涉もほしい物の一つではあるがとても母には話すことも出来ない。高価な物であることは確かだつた。冬になると殿川の親や兄弟たちは、寺の近くまで迎えに出ていた。その光景を目の前にと涉はたまらなくなるが、それは一瞬のことで俺には峠の頂上に父さんが待っているんだと、新聞を配る足が速くなる。気が付けばい

つも走っている。米本君は、

「俺先に行くから、頂上を照らしてくれるか。どこまで光が届くか調べたいんや」

と細い道を駆け上がつていった。

「おい、大山君。照らしてみてくれ」

と声が飛ぶ。大山君は、

「どうや、明るいやる。木の枝まで見えるやる。買うたばかりやからなあ」

と大声でかえずと、

「その箱の中に光る薬が入つてるんや。へえー、火傷せえへんの、兄ちゃん」

和子ちゃんは電池を持って歩く大山君の横に並んで、不思議そうに眺めてから前を歩いて

「私の影つてあんなに大きくなるんやなあ。涉兄ちゃん、おぼけやぞう」

と、一番後ろを歩いている涉に、和子ちゃんは嬉しうに声をかける。時々意地悪をしているつもりなのか、一人になつて帰りを怖がる涉の顔を見ながら言う。涉は嫌なことを言う和子ちゃんに苦笑いをするが、夕闇の中では顔の表情までは見えない。涉には、幸いである。

配達が終われば峠の天辺まで駆け上がつて、父さんと話

をしよう。これが渉にとつては、どんなことよりも楽しいひと時なのだ。渉は走りながら思う。今日は何を話そうかなあ、相談に乗ってもらうことあったかなあと思いつかべながらの配達は、心がわくわくしてくる。そうすると、走りながら心の中で父と会話を楽しむことがある。

電池の無い帰り道は、暗く遠い思いがした。峠に向けて走る足はがくがくしてくる。道がぼんやり見えているだけで、でこぼこが見えない。所々に雪の吹き溜まりがあつて、そこだけが白く光っていた。少し風が出てきた。見上げると雲は早い。雪雲の割れ目からは星が見え隠れする。星の光と、遠くに見える外灯の明かりで進んでいく道はなんとなく見えてくる。トラックの轍が深く掘れていて、足が落ち込むと渉の膝まである。それだけはないとしても避けなければならぬ。こんなことで時間をかけていては遅くなるばかりである。手袋の中の指はじつとりと汗が滲んでいる。背中にも汗を感じていた。トラック道が左に大きくカーブしている所を、まっすぐに急な近道を駆け上がった。頂上である。ここまで来ると、枯れ枝が音を立てて飛んでくる。渉は、マフラーを飛ばされないように首に巻きつけて一息つく。雲がどんな流れでゆく。落ち葉が風に舞って頬を掠める。黒い

雲の間から星が見えてくるとほっとする。こんなきれいな空を友達は知っているだろうか、見せてやりたい。そんな空に父がまっているのだ。耳を澄ますと、木々の枝がきしむ音に混じって聞こえてきた。父の声である。

「渉、遅かったなあ。でも内田のおばあちゃんはこのころのやさしい人やなあ。お孫さんのことをほんとうに可愛いんや。怒らずに待つ気になってくれてよかったなあ、父さんもほっとした。渉、冬は峠の辛い時期やから弱音を吐かずにがんばってなあ。母さんを助けてやってくれ。おばんも大切にしてやってな」

と言うと、後は立ち木の軋む音が急に大きくなって、渉の足を急かせるのだった。

おわり